

おおさか
KEY
ワード
第32回



写真：大正末から昭和初期に刊行された川柳雑誌「大大阪」。
表紙にはカフェのモダンな女性。



写真：「カフェの唄」、大阪で発行された流行歌の歌詞集で
雰囲気はまだ大正ロマン。

耳をつんざく jazz 的 狂燥曲

ダンス、ダンス、ダンス、道頓堀に踊るひとびと

“道頓堀ジャズ”という言葉が御存じだろうか。少年時代に道頓堀の出雲屋音楽隊に入っていたポップスの大作曲家・服部良一(1907～93)は、その自伝『ぼくの音楽人生』(中央文芸社、昭和57年)の第1章を「道頓堀ジャズ」と題し、戦前の道頓堀の街が、“ジャズ”のメッカ、ニューオーリンズのようにだったと記している。服部の曲はモダンで洗練され、“日本のガーシュイン”とも讃えられている。ロシアから亡命した音楽家エマヌエル・メッテルに学び、大阪フィルを率いた指揮者の朝比奈隆と同門になることも面白いが、その服部が、大阪人としての愛着をこめて“道頓堀ジャズ”という言葉呼び起こしているのである。

大正末から昭和初期、道頓堀のカフェやキャバレー、ダンスホールで盛んに“ジャズ”が演奏された。この場合の“ジャズ”は、シャンソンやラテンなども含み、海外から新しく入った広い意味の軽音楽を指す言葉で、踊るための音楽、ダンスのための音楽であるという。“カフェ”もレトロ調に“カフェ”と書き記そう。

鹿鳴館では政策的な円舞会が催されたが、明治以降、日本では、西洋音楽を摂取するに際し、動かずにじっと鑑賞する習慣ができた。周防正行監督の映画『Shall we ダンス?』(平成8年)でも、いまだ一般の日本人は社交ダンスを踊るのが照れくさいのではないか。その習慣を最初に破り、ひろく大衆が踊りだすきっかけとなったのが“ジャズ”だとされるのである。

昭和5(1930)年刊の案内記『道頓堀通』(四六書院、通叢書の一冊)には、「道頓堀の交響楽」の章があり、「道頓堀行進曲」の作詞者・日比繁治郎が「電飾と雑音の交響楽。それに一段の近代味を加へて道頓堀は、最近、昭和時代に入るとともに、一層“狂燥的乱舞時代”になり“ジャズの狂燥曲”が吾人の耳朶をつんざくばかり」とレポートしている。クラシックでも、ベルリンフィルを指揮して貴志康一が録音した自作の管弦楽曲「道頓堀」に“ジャズ”の雰囲気があるかもしれない。

当時の道頓堀には、松竹座ジャズバンド、河合ダンス団、フィリピン人のカールトン・ジャズバンドや、カフェー

専属の赤玉ジャズバンド、美人座ジャズバンドがあり、曲では《オリエンタルダンス》《パレンシア》《マイブルーヘブン(私の青空)》《テルミー》《アラビアの唄》などが一世を風靡した。

カフェやキャバレーの広告チラシにも、“道頓堀ジャズ”の街の熱気が記録されている。昭和2(1927)年3月に道頓堀・中座東隣に開店した「南地赤玉」のチラシ広告には、黒人のジャズバンドが登場し、最もモダン、メロディの珍客、異国情調の代表などと宣伝され、同年10月に道頓堀川に面して登場したキャバレー「道頓堀赤玉」のチラシにも「ジャズバンド毎日演奏」と記された。店の内装も「ローマ大宮殿」「伊太利ベニス情調」「古代エジプト風」などを謳い、エキゾチシズムに満ちている。

「道頓堀赤玉」は、後に心斎橋・そごうや難波の新歌舞伎座で知られる建築家・村野藤吾が増改築し、パリのムーラン・ルージュを模した風車のネオンが廻る姿が溝口健二の映画「浪華悲歌」に写されている。織田作之助の小説「雪の夜」にも、「あたりの空を赤くして、ぐるぐるまわっているのを、地獄の鬼の舌みたいや」と風車が登場し、「突如としてなから楽隊が鳴ったので、びっくりした拍子に、そわそわと飛び込み、色のついた酒をのまされて、酔った。」と主人公に体験させている。

盛り上がった“道頓堀ジャズ”だが、大正15(1926)年12月25日に大正天皇が崩御されたにもかかわらず、クリスマスと重なって踊り騒いでいたことで、しだいに警察に締めつけられることになる。ついに大阪からダンスホールはなくなり、神崎川を越えて隣県、阪神国道沿いの尼崎、杭瀬へと移っていった。

道頓堀というと演歌のイメージがあるかもしれないが、世界に開かれ、モダンで躍動した音楽の街であったことは再認識されてもよい。往年の活気が道頓堀にふたたび戻らんことを。

Play Once More Again! (もう1回!)